

## ■グロリオサの催芽温度と草丈、生育との関係

グロリオサのハウス栽培では草丈が長くなることから、茎を折り曲げた誘引栽培が行われています。そこで、草丈を短くする目的で催芽温度について検討したところ、催芽温度が葉数や草丈、花らい数等に影響を及ぼすことがわかりましたので紹介します。

試験には、高知県独自品種の‘トロピカルレッド’と‘ミサトレッド’および市販品種の‘ローズクイーン’を用いました。20℃で40日間、25℃で30日間、30℃で23日間催芽した後、12月5日に、最低夜温10℃加温ハウスに株間10cm、条間30cmの2条植えで定植しました。

その結果、定植時には、芽長はいずれの催芽温度でもほとんど同じでしたが、分化葉数は催芽温度が低い

ほど少なくなりました。また、定植後の葉数増加はいずれも1～8枚程度と少なかったことから、催芽温度が低いほど採花時の葉数は少なくなり、茎長も短くなりました（図1）。これらのことから、葉数は定植時にほぼ決まっており、採花時の葉数が少なく、草丈を短くするには、20℃で催芽するとよいことがわかりました。しかし、‘ミサトレッド’では20℃で、‘トロピカルレッド’では20℃や25℃で催芽した場合に花らい数が減少しました（図2）。また、採花日や茎径にはいずれの品種・催芽温度においても差が認められませんでした。

今後は、花らい数を減少させずに草丈を短くする催芽方法について、さらに検討していく予定です。

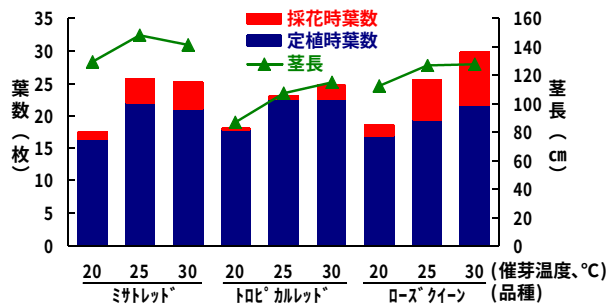


図1 催芽温度と各品種の葉数ならびに茎長

注) 20℃で40日間、25℃で30日間、30℃で23日間催芽した後、最低夜温10℃加温ビニルハウスに定植。

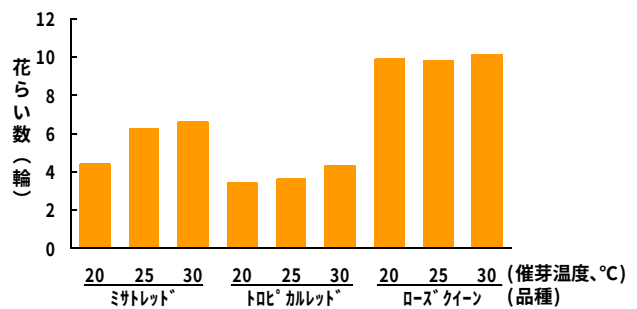


図2 催芽温度と各品種の花らい数

注) 図1と同じ。

[花き科 二宮千登志]